

日本と中国の若者における認知症の高齢者への態度とその関連要因

木下 香織¹⁾*・古城 幸子²⁾・三宅 俊治³⁾・劉 亜萍⁴⁾

1) 新見公立大学健康科学部 2) 吉備国際大学保健福祉学部看護学科
3) 吉備国際大学心理学部心理学科 4) 内蒙古財経大学公共管理学院

(2017年12月20日受理)

本研究の目的は、超高齢社会の日本と高齢化社会へと進む中華人民共和国（以下、中国とする）の若者の認知症の高齢者への態度とその関連要因を明らかにすることである。調査内容は、性別、年齢、家族構成、祖父母との交流頻度などの属性のほか、『寛容』『拒否』『距離感』『親近感』の4因子で構成される認知症の高齢者への態度などとした。その結果、認知症の高齢者への態度は、中国の若者のほうが肯定的で、中国のみ祖父母との交流頻度の関連で有意差があった。この背景には、各国の認知症の有病率の違いや制度文化的な違いによる影響が考えられた。一方、両国に共通する関連要因は、性別、祖父母以外の高齢者との交流頻度や高齢者へのボランティア経験であった。認知症のひとにやさしい社会の実現のために、対人援助の専門職への志望の有無にかかわらず、若者が高齢者と交流する機会を作ることの重要性が示唆された。

(キーワード) 若者、態度、認知症高齢者、日本、中国

はじめに

高齢化が進むわが国において、認知症高齢者数の増加の予測への対応が継続的かつ段階的に進められており、2015年1月からは「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン)」が取り組まれている。認知症高齢者と家族にやさしい地域づくりを目指して、認知症サポーター養成講座では若年層もその対象としており、認知症の高齢者と家族への日常生活の中での支援的な役割を期待されている。しかし、高齢者のいる世帯の構成割合では、親・子・孫の三世帯世帯はこの30年間で33.3%（1995年）から11.0%（2016年）となり、3分の1に減少した¹⁾。現代の若者は、日常的に高齢者と関わる機会が少ないことがうかがえる。

中国においては、1978年から始まった「一人っ子政策」などの影響を受け、社会は急速に高齢化している。2013年の65歳以上の人口は1億2714万人で、総人口の9.4%を占めている。高齢者人口は毎年860万人ずつ増加しており、高齢化率の推移として2025年に13.4%、2030年には15.9%と急激なスピードで高齢社会へ突入することが予測されている²⁾。1996年に制定された中国老人權益保障法によって、老親扶養が義務化されているが、独居高齢者の増加、在宅介護サービスの整備不足など、社会の高齢化への対策の遅れが指摘されている³⁾。社会の変動のなかで、中国の若者は老親扶養の担い手として、また社会全体として高齢者を支える役割が期待される。

そこで、筆者らは、超高齢社会の日本と高齢化社会へと進む中国の若者の高齢者への意識について研究に取り組んだ。本報では、日本と中国の若者の認知症の高齢者への態度とその関連要因について明らかにすることを目的とした内容を報告する。

1 研究方法

1. 対象

調査対象は、日本と中国の青年期の若者で、入学後間もない大学生とした。

- 1) 日本…中国地方A県内の3大学の学生467名
- 2) 中国…内蒙古自治区内の大学生562名

2. 調査時期

大学入学後2～3ヶ月の時期に調査を実施した。

- 1) 日本…2016年6月～8月
- 2) 中国…2016年9月～11月

3. 調査方法

質問紙を用いた留め置き調査

4. 調査内容

1) 基本属性…年齢、性別、家族構成、祖父母との交流頻度、他の高齢者との交流頻度、高齢者へのボランティア経験等

*連絡先：木下香織 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

2) 認知症に関する態度尺度・・・金ら⁴⁾が、統合失調症などの精神障害者に対する態度調査、精神障害者に対する社会的距離およびスティグマなどの文献を参考に作成した尺度である。構成概念妥当性、内的整合性が確認されている。尺度は14項目からなり、『寛容』『拒否』『距離感』『親近感』の4因子で構成される。各項目を「全く思わない」「あまり思わない」「ややそう思う」「そう思う」の4件法で質問し、56点満点で得点が高いほど肯定的な態度であることを示す。各因子は、『寛容』20点、『拒否』16点、『距離感』12点、『親近感』8点となる。

5. 分析方法

態度尺度は、逆転項目の処理を行い、肯定的であるほど点数が高くなるよう各項目に1点から4点を付し、得点を求めた。統計解析ソフトSPSS19.0J for Windowsを用いて、記述統計、平均値の差の検定および探索的因子分析をおこなった。なお、欠損値についてはペアワイズ削除をおこなった。

6. 倫理的配慮

吉備国際大学研究倫理審査会により承認（承認番号16-09）を得た。また、使用した尺度の作成者に使用許諾を得た。

調査においては質問紙の表紙に、本研究に関する説明書を添付し、説明の文書には、研究目的、データ処理方法、匿名性が完全に確保されること、学生においては成績に関与

しないこと、参加は自由意志で拒否による不利益は全くないことを記載した。中国での調査については、中国の共同研究者の管理の下で実施した。

II 用語の定義

本研究において「高齢者」とは、WHOの定義により65歳以上とする。ただし、中国においては、1996年に制定された「老人権益保障法」で60歳以上を高齢者としている。そのため、文中での高齢化率などの記載においては、60歳以上、65歳以上の説明を加えた。

III 結果

1. 調査対象者の属性

調査対象者（以下、若者とする）の属性を表1に示した。

平均年齢は日本18.32歳、中国18.78歳、性別では日本59.1%、中国71.5%が女性、祖父母との同居経験は日本33.0%、中国30.8%が「あり」であった。大学の専攻について、文系が日本48.8%、中国84.0%で、全体の文系の割合は68.1%であった。

日中間で有意な差を認めたのは、性別 ($p=0.000$) のほか、祖父母との交流頻度は日本の方が多い ($p=0.002$) が、祖父母以外の高齢者との交流頻度は日本の方が少なく ($p=0.000$)、高齢者へのボランティア経験は日本の方が多かった ($p=0.000$)。祖父母との同居や両親と祖父母との交

表1 調査対象者の属性

項目	日本	中国	計	p値	
性別	男	191 (40.9%)	160 (28.5%)	351 (34.1%)	p=0.000
	女	276 (59.1%)	401 (71.5%)	677 (65.9%)	
祖父母との同居	あり	154 (33.0%)	173 (30.8%)	327 (31.8%)	p=0.460
	なし	312 (67.0%)	389 (69.2%)	701 (68.2%)	
両親と祖父母との交流頻度	よく交流あり	275 (59.7%)	350 (64.5%)	625 (62.3%)	p=0.356
	時々交流あり	154 (33.4%)	164 (30.2%)	318 (31.7%)	
	あまり交流なし	23 (5.0%)	23 (4.2%)	46 (4.6%)	
	全く交流なし	9 (2.0%)	6 (1.1%)	15 (1.5%)	
祖父母との交流頻度	よく交流あり	228 (49.0%)	203 (37.5%)	431 (42.8%)	p=0.002
	時々交流あり	190 (40.9%)	274 (50.6%)	464 (46.1%)	
	あまり交流なし	36 (7.7%)	54 (10.0%)	90 (8.9%)	
	全く交流なし	11 (2.4%)	10 (1.8%)	21 (2.1%)	
祖父母以外の高齢者との交流頻度	よく交流あり	40 (8.6%)	41 (7.4%)	81 (7.9%)	p=0.000
	時々交流あり	158 (34.0%)	253 (45.6%)	411 (40.3%)	
	あまり交流なし	175 (37.6%)	231 (41.5%)	406 (39.8%)	
	全く交流なし	92 (19.8%)	29 (5.2%)	121 (11.9%)	
高齢者へのボランティア経験	あり	196 (42.0%)	127 (22.6%)	323 (31.4%)	p=0.000
	なし	271 (58.0%)	434 (77.4%)	705 (68.6%)	

流頻度には有意差は認められなかった。

いては、中国の若者の得点が有意に高かった。

2. 若者の認知症の高齢者への態度

1) 日中比較

認知症の高齢者への態度尺度の結果について、因子ごとの比較を表2に、質問項目ごとの比較を表3に示した。

因子ごとの比較では、中国の若者のほうが、4因子とも有意に得点が高かった（『距離感』のみ $p=.045$ 、その他は $p=.000$ ）。一方、質問項目ごとの比較では、14項目すべてで有意な差を認めた（ $p=.000\sim.037$ ）。「認知症の人も周りの人と仲良くする能力がある」「認知症の人の行動は、理解できない」「家族が認知症になったら、近所づきあいがしにくくなる」など6項目においては、日本の若者の得点が高い。また、「認知症の人も喜びや楽しみを分かち合える」「認知症の人はいつ何をするかわからない」「認知症の人が困っていたら、迷わず手を貸せる」など8項目にお

2) 関連する要因

国別にみた認知症の高齢者への態度に関連する要因の分析結果を表4に示した。

両国に共通して得点に有意な差を認めたのは、性別、祖父母以外の高齢者との交流頻度、高齢者へのボランティア経験であった。性別について、日本での『寛容』は女性の得点が高いが高かったが、『拒否』『距離感』は両国とも男性の得点が高いが高かった。祖父母以外との高齢者との交流頻度では、両国ともに『寛容』『親近感』は交流頻度が多い者の得点が高いが高かったが、『拒否』のみ交流頻度が少ない者の得点が高いが高かった。高齢者へのボランティア経験では、『寛容』は両国に共通して経験ありの者の得点が高いが高かったが、日本のみ『親近感』も経験ありの者の得点が高いが高く、『拒否』『距離感』は経験なしの者の得点が高いが高かった。

日本のみ得点に有意な差を認めたのは大学での専攻であり、理科系のほうが文科系よりも『拒否』において有意に高かった。一方、祖父母との交流頻度は中国のみで、『寛容』『親近感』では交流頻度が多い者の得点が高いが高かったが、『拒否』のみ交流頻度が少ない者の得点が高いが高かった。

表2 認知症に関する態度 因子ごとの日中比較

	日本 n=467	中国 n=562	p値
寛容	14.77	15.50	p=.000
拒否	9.92	10.84	
距離感	8.04	9.04	p=.045
親近感	5.47	6.27	p=.000

表3 認知症に関する態度 質問項目ごとの日中比較

*は逆転項目

因子	項目	日本 n=467	中国 n=562	p値
寛容	1 認知症の人も喜びや楽しみを分かち合える	3.00	3.26	p=.000
	2 普通の生活でもっと認知症の人とかかわる機会があってもよい	2.81	2.91	p=.037
	3 認知症の人も周りの人と仲良くする能力がある	3.00	2.67	p=.000
	4 認知症の人も地域活動に参加したほうが良い	2.97	3.45	p=.000
	5 認知症の人が、自分の家の隣に引っ越してきても構わない	3.01	3.20	p=.000
拒否	6 認知症の人の行動は、理解できない*	2.40	2.02	p=.000
	7 認知症の人はいつ何をするかわからない*	2.93	3.12	p=.000
	8 認知症の人とは、できる限り関わりたくない*	1.97	1.78	p=.000
	9 認知症の人は、周りの人を困らせることが多い*	2.79	2.23	p=.000
距離感	10 家族が認知症になったら、近所づきあいがしにくくなる*	2.02	1.66	p=.000
	11 家族が認知症になったら、世間体や周囲の目が気になる*	2.09	1.83	p=.000
	12 認知症の人は、われわれと違う感情を持っている*	2.15	2.53	p=.000
親近感	13 認知症の人が困っていたら、迷わず手を貸せる	2.78	3.39	p=.000
	14 認知症の人と、ちゅうちよく話せる	2.69	2.88	p=.001

表4 国別にみた認知症に関する態度に関連する要因

要 因		日本 n=467								中国 n=562							
		寛容		拒否*		距離感*		親近感		寛容		拒否*		距離感*		親近感	
性 別	男	13.89	=.000	10.44	=.003	6.49	=.024	5.35	=.117	15.28	=.200	9.56	=.004	6.27	=.049	6.12	=.089
	女	15.38		9.85		6.09		5.56		15.59		9.01		5.94		6.33	
大学での専攻	文科系	14.54	=.108	9.88	=.038	6.30	=.644	5.38	=.177	15.52	=.554	9.20	=.309	6.06	=.289	6.32	=.054
	理科系	14.98		10.29		6.22		5.55		15.35		8.97		5.84		6.03	
祖父母との交流頻度	多い	14.79	=.665	10.02	=.064	6.25	=.800	5.49	=.566	15.60	=.004	9.09	=.003	5.99	=.213	6.32	=.010
	少ない	14.60		10.62		6.32		5.36		14.61		9.87		6.29		5.87	
祖父母以外の高齢者との交流頻度	多い	15.10	=.039	9.73	=.002	6.20	=.594	5.73	=.001	15.79	=.005	8.91	=.002	5.98	=.694	6.45	=.001
	少ない	14.53		10.34		6.30		5.29		15.18		9.45		6.04		6.08	
ボランティア経験	有	15.36	=.000	9.59	=.000	6.02	=.018	5.79	=.000	16.07	=.004	8.92	=.111	5.90	=.393	6.40	=.184
	無	14.34		10.44		6.43		5.24		15.33		9.24		6.06		6.23	

表5 認知症に関する態度尺度の各項目の所属先の比較

調査対象		各設問項目の所属先因子			
		I	II	III	IV
金ら 2011年	大学1、2年生	1,2,3,4,5 寛容	6,7,8,9 拒否	10,11,12 距離感	13,14 親近感
本研究 (全体)	大学1年生	1,2,3,4,5,13,14 (寛容・親近感)	8,10,11 (距離感)	6,7,9 (理解困難感)	12
本研究 (日本のみ)		1,2,3,4,5,13,14 (寛容・親近感)	8,10,11,12 (距離感)	6,7,9 (理解困難感)	-
本研究 (中国のみ)		1,2,3,4,5,13,14 (寛容・親近感)	6,8,10,11 (距離感)	7,9,12 (理解困難感)	-

3) 因子分析

認知症の高齢者への態度尺度の各項目の所属先因子の比較を表5に示した。

日本と中国の全体および国別に因子分析を行ったところ、因子数および所属先因子に違いがみられた。この尺度を作成した金ら⁴⁾の分析では4因子が抽出されているのに対し、本研究データの分析ではいずれも3因子の抽出となった。本研究での第I因子は、全体、日本、中国に共通して金らの第I因子と第IV因子の項目で構成されており、『寛容・親近感』と命名できた。本研究での第II因子と第III因子は、全体、日本、中国の構成する因子が類似しているものの完全に一致したものとはならなかった。金ら⁴⁾の分析を参考に、第II因子を『距離感』、第III因子を『理解困難感』と命名した。

IV 考察

1. 若者の背景

祖父母との同居は両国ともに約30%であった。65歳以上の高齢者がいる世帯のうち、三世帯世帯の割合は1割強であることから、調査対象者の祖父母との同居率は高い結果であった。内蒙古自治区などの経済発展が遅れている地域では、経済が発展している地域に比べて60歳以上の高齢者が占める割合は低くなっている。そのため、両国ともに調査を実施したのは国内でも地方に所在する大学であるため、本研究の対象者の背景として、同居率の高さを示していると考えられる。

2. 認知症の高齢者への態度

1) 日本と中国の若者の比較

認知症の高齢者への態度は、『寛容』『拒否』『距離感』『親近感』の4因子ともに、中国の若者のほうが肯定的であることが明らかになった。

認知症の有病率をみると、日本では2015年に16.0%である。2025年には約700万人、高齢者の5人に1人になると見込まれ⁵⁾、国家戦略として取り組まれているため、若者も含めて関心の高まりが予想できる。一方、中国では、都市部では10.4%、地方都市では7.3%との報告⁶⁾がある。中国の調査では認知症者の割合が低いとされる60歳から64歳の高齢者を含むこと、認知症者の割合が高いとされる後期高齢者の割合が日本に比べて低いことなどから、中国の高齢者における認知症高齢者の割合は日本に比べて低いと報告されている。そのため、中国の若者にとって認知症高齢者はまだ身近に感じにくいことも予想された。さらに、中国では、法律によって老親扶養を義務化していることから、中国の若者の認知症に対する肯定的な態度につながったと考える。

2) 認知症の高齢者への態度の構造

因子分析の結果、本研究では、認知症への態度は3因子『寛容・親近感』『距離感』『理解困難感』が認められ、金らの分析とは若干、異なる半面、日本と中国の若者の認知症への態度の構造は類似していることが明らかになった。すでに超高齢社会に突入した日本と、現在は高齢化社会ながら急速に高齢化が進む中国とでは、社会の高齢化の現状が異なる。また、同じ東アジアに属する両国であるが、宗教的な背景の共通点と相違点をもち、特に中国においては儒教思想の影響も大きい。さらに、公的な介護保険制度が施行されて約20年経つ日本と老親扶養は義務化されながらも介護者支援は未発達な中国では、高齢者施策においても相違が大きいと思われる。加えて、中国では主要民族である漢民族と多くの少数民族で構成され、今回の調査を行なった内蒙古自治区にも少数民族が存在することから、対象者の多様性も大きいことが予想される。以上のような多くの相違点がありながら、認知症の高齢者への態度の構造は類似していることがわかった。しかし、その考察を深めるためには、今後、調査地域を拡大し、対象者の属性等の調査内容を吟味した更なる検討が必要である。

3. 認知症の高齢者への態度に関連する要因

1) 両国の若者に共通する関連要因

共通する要因として、まず性別が挙げられ、『拒否』『距離感』において男性のほうが有意に肯定的であった。上海市居住者を対象とした研究では、「認知症は老化の正常な一部である」という考え方に性別が影響しており、女性が広く同意していたと報告している⁷⁾。しかし、調査対象者の年齢が広く、異なる尺度を用いた調査であるため比較は困難で、性別と認知症の高齢者への態度との関連は今後も

検討が必要である。

祖父母以外との高齢者との交流頻度では、交流の多い者のほうがより『寛容』で『親近感』を抱いている一方、『拒否』のみ交流頻度が少ない者のほうが肯定的な態度であった。また、高齢者へのボランティア経験では、経験ありの者のほうが『寛容』であった。本研究の対象者の祖父母との同居率の高さは特徴的ではあるが、両国ともに三世代世帯の割合は急速に減少しており、若者が日常的に高齢者と触れ合う機会は共通して少ないと思われる。血縁者以外の高齢者との交流も認知症高齢者への肯定的な態度と関連があることは、三世代同居の減少している両国において、若者の認知症高齢者への肯定的な態度を醸成するうえで注目すべき点であると考えられる。保健・医療・福祉の専門職をはじめとした若者の職業選択だけでなく、認知症のひとにやさしい社会の実現のために、若者に認知症の高齢者への肯定的な態度が養われていくことが望まれる。そのため、対人援助の専門職への志望の有無にかかわらず、若者が高齢者と交流する機会を作ることの重要性が示唆された。

2) 日本の若者に特徴的な関連要因

日本のみ得点に有意な差を認めたのは大学での専攻で、理科系のほうが文科系よりも『拒否』において有意に高かった。日本の対象者は文科系と理科系がほぼ同率であった。大学入学後間もない時期の調査であるものの、若者の専攻により認知症の高齢者への態度が異なることを示す結果であった。理科系の専攻では、看護学ほか保健・医療系大学の新生であることが推定され、対人援助に関係する専攻の若者は、認知症のひとの言動の理解に入学時から肯定的な態度をもつ傾向がうかがえる。専門知識の修得とともに、より肯定的な態度を養う教育の工夫が求められる。

高齢者へのボランティアの経験ありの者のほうが『親近感』を抱いている一方、『拒否』『距離感』は経験なしの者のほうが肯定的な態度であった。つまり、ボランティア経験によって醸成される認知症高齢者への肯定的な態度は限局的であることがわかった。高齢者へのボランティア経験は、福祉施設などなんらかの支援を必要とする高齢者を対象とすることが多く、その経験が認知症高齢者の言動理解の困難さにつながっていることが推察される。そのため、高齢者へのボランティア経験の機会には、認知症に関する基礎的理解などの学習の支援もおこなわれる必要があると考える。

3) 中国の若者に特徴的な関連要因

中国のみ得点に有意な差を認めたのは祖父母との交流頻度で、『寛容』『親近感』では交流頻度が多い者の得点有意に高かったが、『拒否』のみ交流頻度が少ない者の得点有意に高かった。『寛容』『親近感』は、認知症の

ひととの交流や社会参加などに関する項目であり、祖父母との交流によって、若者の異なる世代との交流に肯定的な態度が醸成されることがうかがえた。一方、『拒否』は、認知症のひとの言動の理解に関する項目である。これらの項目について、祖父母との交流頻度が少ない者のほうが肯定的であったことは、認知症のひととの交流頻度の少なさ、あるいは認知症に関する知識との関連が考えられた。しかし、認知症のひととの交流頻度については、今回の調査に含まれていないため言及できない。

Shanghai communities: the public awareness of and attitude towards dementia. *Psychogeriatrics*, 11 (2), 83-89, 2011.

V 本研究の限界と課題

本研究結果は、日本、中国ともに限られた地域にある大学の学生を対象としているため、一般化の域にない。両国は高齢化の現状のほかに、宗教的な背景や儒教思想の影響、高齢者施策など、さまざまな相違点をもつため、対象地域の特性を考慮した調査の継続が望まれる。また、認知症に関する知識と認知症の高齢者への態度との関連、高齢者への差別意識と認知症の高齢者への態度についての検討が課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきました大学生の皆さまに心から感謝申し上げます。

なお、本研究は、吉備国際大学共同研究費助成研究の一部である。第22回日本老年看護学会学術集会において発表した内容に加筆修正した。

文献

- 1) 厚生労働省ホームページ[インターネットOn line], [2017年11月] <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/02.pdf>, 2017.11.
- 2) 周金蘭: 中国における高齢化の現状と高齢者対策. 現代社会文化研究, 135-152, 2015.
- 3) 石井路子: 中国における高齢者介護サービスの現状と課題, 城西国際大学紀要, 21 (4), 1-29, 2013.
- 4) 金高閭, 黒田健二: 認知症の人に対する態度に関連する要因 - 認知症に関する態度尺度と知識尺度の作成 -. 社会医学研究, 28 (1), 43-55, 2011.
- 5) 内閣府ホームページ[インターネットOn line], [2017年11月] http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/s1_2_3.html
- 6) 細川淳嗣, 西田征治, 國定美香ほか2名: 日本・ドイツ・中国の認知症高齢者の実態と施策の国際調査. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 17 (1), 73-82, 2017.
- 7) Li X, Fang W, Su N, Liu Y, Xiao S, Xiao Z.: Survey in